

あるむぜお60

府中市郷土の森博物館だより

al museo NO. 60

2002年6月20日



府中ロストワールド

1

目次

- 1-2 府中ロストワールド1
- 3 府中発掘事始1
- 4-5 展示会への招待「世界の昆虫博2002」
- 6-7 ノート「銀河の産声」
- 8 最近の発掘調査
- 9 昨年度報告・新刊情報
- 10 展示室から・元気！ボランティアだより

在る日に 村野四郎

ここはどこかと
訊くひとも居ない
祭のあくる日のように
へんにさみしい家並があった

ぼくは いつ旅に出たのかしら





とある格子戸の外から覗くと
 さかなの焼ける匂いがながれてきたり
 桔梗の花に
 打ち水のしてある庭がみえ
 そうかとおもうと どこかで
 ——うのはなの
 におうかきねに……と
 季節に戯れている人間の
 やさしいこえがきこえたりした

もう 二度と帰れない世界を
 もういちど覗いてみて
 ぼくは 本当に涙をながしていた
 格子に「曇中」という紙が貼ってあった

府中ロストワールド

記録の中にしかみることのできない失われた風景を
 1980年(昭和55)府中市発行の
 写真集「むかしの府中」に探してみます

1 白い道

「むかしの府中」No.22
 1939年(昭和14)7月
 現 府中市美好町3-20付近

現在の府中市白糸台1丁目、当時は多磨村^{おま}上染屋^{かみでめや}の旧家に生まれた詩人村野四郎は、後年に回想記『わたしの詩的遍歴』(昭和62年 沖積舎)の中で、少年時代の故郷についてこう書いています。

……その中を一筋の白い甲州街道が、庇のひくい農家や、古い売薬の看板をかけた商家や、遊郭の白ちゃけた板塀などをその道筋に置いて、東から西へと長くつづいていた。

こうした部落の上へ、四季は武蔵野特有の花や小鳥や麦埃や、ものうい穂打唄をもってきては、私の少年時代の上を通りすぎたのであった。

大東京の浸蝕はまだはじまらず、街道を走り過ぎる自動車も日に一二台で、そのたびに村は、びっくりしたように目をさました。子供たちは遠くからその音をききつけ、口々に「ジドウシャジドウシャ」と叫びながら道へ出てきては、走り過ぎた車の排気ガスに鼻をひくひくさせ、かすかな文明の匂いにうっとりするのであった。……

1901年(明治34)生まれの詩人ですから、このような情景は明治末から大正の初めくらいでしょうか。1912年(大正元)9月の統計によれば、自動車の数は北多摩郡全部で1,436台。現在では府中市内の登録数だけで7万台を優に越えています。排気ガスの“匂い”ならぬ“臭い”は、もはや文明の立ち遅れと見なされつつあります。

四郎も言うように、この頃の道、特に夏の風景には“白い”という形容詞がよくついています。江戸時代の記述ではあまり見られない表現なので、この印象は近代になってからのものと思われます。江戸時代と明治以降の日本の道路事情で、大きく異なっただのは車の往来の有無でした。車の増大につれて問題となったのは道路の舗装です。

ピラミッド建設やローマ帝国の昔から、重量物を通すために石を敷くという工法も用いていましたが、ヨーロッパでも近代的な舗装道路の普及は19世紀初頭のイギリスからだそうです。当時盛んになってきた馬車交通に対応するために、廃水がよく、丈夫でしかも工費のかからない道路の工法が考案されました。これは細かく砕いた石を突き固めて敷くというものでした。

江戸時代に到っても、陸運による大量輸送はあまり用いられなかったため、人や馬に耐える道路の堅牢さは“築き固め”“踏み固め”で事足りていた日本に、文明開化とともに徐々に広まったのがこの舗装方法だったようです。

日照りが続くと土ぼこりが立ち、強い日ざしに反射する、乾いた風景の中に通り抜ける白い道のイメージは、このいわゆる砂利道のものでしょう。

爆発的な自動車の増加に伴い、日本でも20世紀後半からはアスファルト舗装が主体になりました。グレーから黒い印象だったアスファルト道路も、現在では様々な工法がさらに開発され、赤や緑のカラー舗装も登場しています。建物も低く、空との距離も近く見えた“白い道”の記憶は遠いものになりました。

(馬場 治子)

国府跡発掘の出発点

武蔵国府の考古学的な解明を最大の目的として、府中市教育委員会が主体となり、遺跡の発掘調査に組織的に取り組んだのは一九七五年以降のことである。

しかし、これより前にも発掘調査が行われていた。本シリーズでは、府中でごく初期に行われた、いわば揺籃期の発掘調査のいくつかを振り返ってみたい。

府中で最初の発掘調査はいつ、どこで行われたのか、実のところハッキリしない。宝探的な要素の強い発掘が、かなり古くから行われているからである。

ただ、一九五四年七月に行われた片町遺跡の調査は、記念すべき出来事といつてよい。

この発掘調査は、道路工事の際に堅穴建物跡の一部が破壊され、土器の類が発見されたのをきっかけに行われた。市教育委員会が主催した発掘調査の第一号であったばかりか、すでに縄文土器の編年研究に大きな功績をあげていた甲野勇さん（一九〇一—一八七）に指導を仰ぎ、本格的に考古学の発掘手法を導入した調査でもあった。

この時発掘したのは一四〇〇mほどと思われるが、ここから一四棟の堅穴建物跡などを見つけ出している。いつまでもなく市内ではじめて発掘された、古代国府の時代の庶民の住まいである。この一四棟の中に

は、興味深い被災建物跡もあるのだが、これについては後に紹介することとして、ここではいままじこの調査の意義を述べておこう。何しろ、この遺跡の発掘調査は、これ以降およそ一〇年に亘って、府中の発掘に大きな影響を与えたのだから。

その第一は、指導者や参加者がこの調査結果に力を得て、以後の調査に向かわせたことにある。一九五七年高倉遺跡、五八年片町遺跡・新宿遺跡、五九年高倉遺跡、六〇年片町遺跡、六二年美好町遺跡と、ほぼ連年調査していることから、この調査がその後の原動力となったといつて間違いない。

甲野さんはこうした一連の調査の目的を、一九六〇年に著した『武蔵野を掘る』のなかで「国府の地における民家の配置その他によって、条里復元の手がかりを求めること」と述べている。今日、武蔵国府跡は全国的にも例のない網羅的な発掘調査によって、国庁を中心とするマチの広がりが見明らかになってきているが、その原点はまさに片町遺跡の調査にあるといえよう。しかも甲野さんは、「条里復元の手がかりを求めること」で、国庁跡を考古学的に探索していく手立てにもしたい、といつ希望をも同書で述べている。

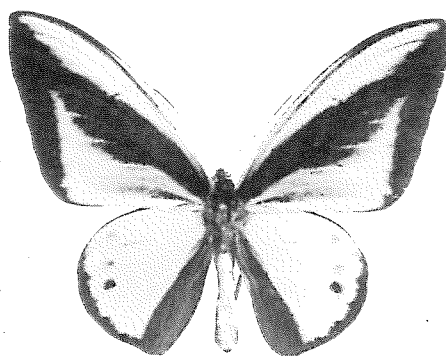
片町遺跡の発掘調査はあらゆる点で、今日に続く国府跡発掘調査の出発点なのである。

（深澤 靖幸）



片町遺跡第1次調査の様子
1957年7月に行われた片町遺跡の調査は、国府跡発掘の記念すべき出発点であった。市立第1中学校を始め近在の中学生、高校生が発掘の主力だった。自分達の住む町の歴史を自らの手で掘り起こす喜びは、大きかったに違いない。

夏休み



ゴライアストリパネアゲハ

7月20日(祝)

～9月1日(日)

「世界の昆虫博2002」がやってくる

大昔から当たり前のように自然と向き合い、常々そこから何かを学び取ってきた先人とは異なり、現代社会に生きる私たちは、まさに都市環境・物質文明の申し子と言えるでしょう。言い換えれば、自然への依存度や恩恵をついつい忘れがちで時を過ごしている現状にどっぷりと浸かっているのが現代人であるとも考えられます。私たちにとって、大自然の営みから味わうことの出来た少年少女時代の幾多の感動は、すでに遠い過去の記憶でしかありません。

自然界を織り成す生き物への関心が失われつつある昨今、私たち人間も生態系を機能させる歯車の一部であることを、もう一度認識し直す必要があるのではないでしょうか？今夏に開催する「世界の昆虫博2002」は、そんな忘れかけた自然への驚異と感動の念を、必ずや取り戻させてくれることでしょう。

今から35億年ほど前の海中で、極めて単純な造りの生命が誕生して以来、波瀾万丈の歴史を繰り広げながら生物は進化を遂げてきました。このため惑星地球には下等なものから高等なものまで、実に多種多様な動植物が繁栄し、まさに生命の星と呼ばれるに相応しい理由がここにあります。

進化系統の流れの上に成り立つ生物分類において、節足動物門と呼ばれるグループがあります。ヒトや鳥・魚のように脊椎を持たず、体節の連続からなる相称の体を有する生き物たちです。私たちには結構馴染みのある動物がこれに含まれます。クモ、ダニ、サソリ、生きている化石・カブトガニなど、名前の知られているものばかりです。また節足動物門の中では、さらに細かく色々なグループ分けがなされています。た

例えば甲殻綱と呼ばれる仲間では、エビ、カニ、シヤコ、ムカデなどが有名です。

さて、そのグループ群のひとつに昆虫綱というまとまりが存在します。この仲間は節足動物門の中でも非常に特殊な仲間です。体が頭・胸・腹の3つに分かれ、頭には1対の触角、胸には3対の脚と、さらには2対の翅を持つという形態です。他の節足動物と決定的に違うことは、翅を持ったということです。翅を持ったということは、飛行が可能になったということです。前後左右はもちろん、垂直方向への移動が容易になったことで、たとえば木の根元から樹冠までのすべてを生活圏として利用できることになったわけです。今日100万種余りと言われる全動物種のうち、昆虫の種類数はわかって

いるものだけで実にその8割以上を占めます。進化の過程で多様な変化を遂げてきたことが繁栄に直結しているのだと思われます。従って氷河の高山から砂漠まで、海中を除けばありとあらゆる所に昆虫は生息しています。そしてそこでは、昆虫たちの生き残りをかけた様々な生活戦略があり、驚くべき形や色の世界が広がっているのです。



コノハムシ

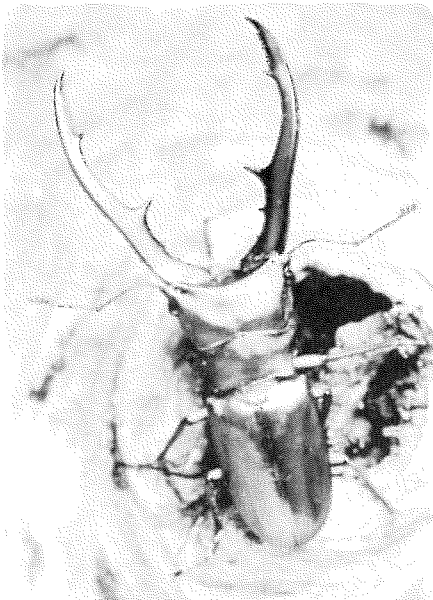
熱帯のジャングルは生物の生息密度が最も濃い地域であり、ここに暮らす昆虫たちは種類も多く、様々な生活をしています。強い陽射しと豊富な食料の中、大型で色彩豊かな種類が数多く棲んでいます。敵に襲われないようフクロウの顔に似せた模様を持つ蝶や、擬態といって木の枝や花びらそっくりの体を持つナフシヤカマキリなど、ひとつひとつがまさに驚異の世界なのです。また一方では先述の氷河や砂漠など、厳しい環境の中で生き抜いている蝶もいます。

地球温暖化に代表される環境悪化、開発に伴う生物種の減少あるいは絶滅促進と、負の要素が充満している世の中です。こんな折、生物の多様性を守ろうとする動きが活発化し、今こそ自然の大切さと、そこに息づく生物たちの保存が意識され始めています。今まで世界には、形容しがたいほどに素晴らしい昆虫たちの世界が存在します。あまりにも巧妙な姿や色を目の当たりにすることで、私たちが守らなければならない自然界の力を、ぜひとも感じてもらえたらと思います。

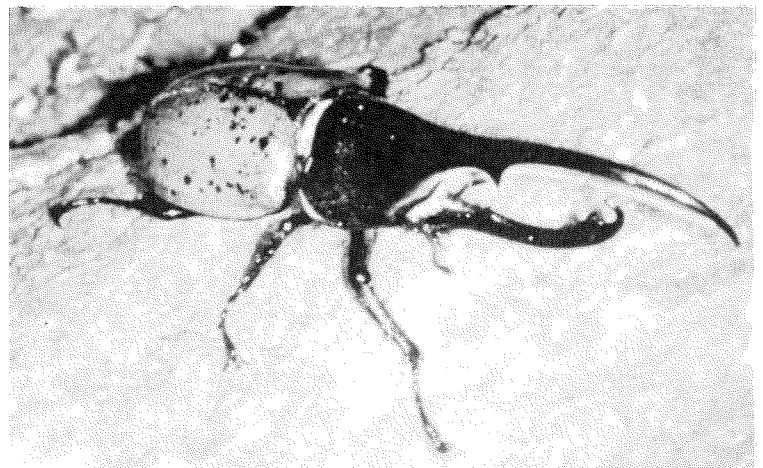
(中村 武史)

☆ ついに登場 生きているカブトムシ！

本展のスペシャルプログラムとして、今まで図鑑や標本でしか見るのできなかった外国産の大型昆虫、ヘラクレスオオカブトやアトラスオオカブトなどが生体資料として公開されます。あこがれのカブトやクワガタに、実際に触れられるコーナーも設けているので、その力強さと迫力を間近で感じられる絶好の機会です。



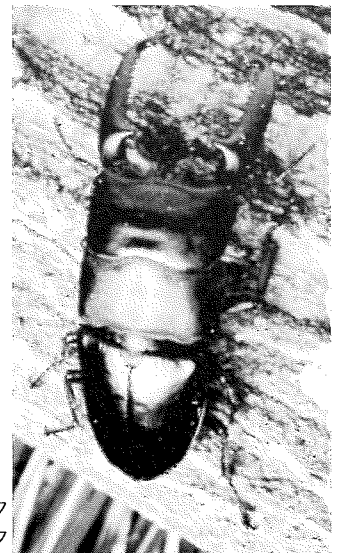
メタリフェルクワガタ



ヘラクレスオオカブトムシ



ネブチューンオオカブトムシ



オオヒラタクワガタ

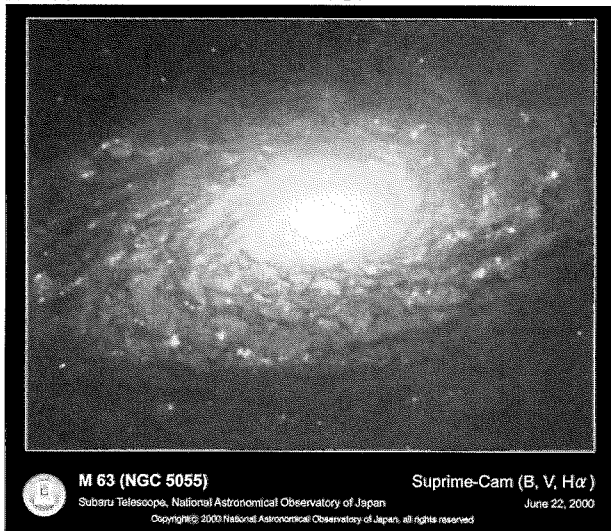
写真提供：(株) エルアイエス

春の夜空は、夏や冬に比べれば少しさみしい星空です。これは春に天の川が見えないためです（実際には、ちょうど地平線に横たわっています）。この天にかかる大きな川が、頭上を通過して見える夏や冬は、にぎやかな星空になります。ここには、たくさんの星と共に変わった天体もあります。星がまばらに集まった散開星団、星が球状に集まった球状星団、もやもやと雲のような散光星雲、円盤やドーナツのような形の惑星状星雲などさまざまです。これらを全て含んだ星の大集団が私たちの銀河系であり、その中から見た銀河系の姿が天の川なのです。銀河系は星だけでなく、その材料にもなる星間物質（宇宙にただよう塵やガスなど）もたくさん含んでいるため、天の川の方角を見ると、それらが邪魔をして遠くまで見通すことができません。反対に、天の川から外れた方向、つまり春の星座の方角を見ると、遠い宇宙まで見渡せます。空気が澄んでいると遠くのビルや山がよく見えるのと同じ原理です。このことから、春の星座の見える方向を「宇宙の窓」と呼んでいます。宇宙の窓に目を向けると、私たちの銀河系と同じ様な星の大集団である「銀河」がたくさん見えます。

ここ数年、いくつかの大きな望遠鏡が宇宙の窓に向けられ、生まれたばかりの銀河が次々に発見されているのです。

▼多種多様な銀河

回転花火、黒眼、親子、車輪どれも銀河に付けられた俗称です。このことから銀河の多様性がうかがわれます。楕円の形に星が集まった楕円銀河、下の写真のように渦を巻いた渦巻銀河、くずれた形をした不規則銀河などなど…。私たちの銀河系は、渦巻銀河だと言われています。今でこそ他の銀河は、私達のいる銀河系と区別されていますが、100年前には銀河が果たしてどんな天体なのか、また、銀河系の中にあるものなのか、外にあるものなのかさえも、全く分かっていませんでした。



すばる望遠鏡がとらえた渦巻銀河 M63 写真提供：国立天文台

▼銀河の発見

はじめて観測的に銀河系の形を調べたのは、18世紀後半に活躍したイギリスの天文学者ウィリアム・

ハーシェルです。彼は、空のいろいろな方向で、望遠鏡の視野内に見える星の数を数えて、宇宙の形が円盤状をしていることを発見しました。しかし当時は、星までの距離を測る方法がなかったため、明るい星は近く、暗い星は遠いという仮定のもとに出された結果でしたので、形も大きさも不確かなものでした。

20世紀初め、セファイドと呼ばれる、変光星を使って距離を求める方法が発見されました。そして銀河系の形や大きさが、より明らかになってきました。しかし、他の銀河が、銀河系の中にあるのか外にあるのかについては、まだ分かっていませんでした。

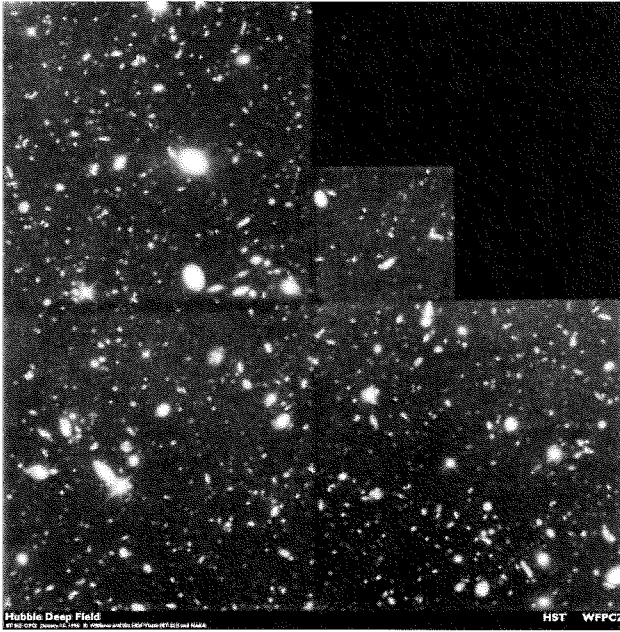
やがて1923年になってウィルソン山天文台のエドウィン・ハッブルが渦巻銀河 M31、M33 にセファイドを発見し、それらが私たちの銀河系の外にある別の星の大集団であることを初めて突き止めたのです。

また、その当時銀河のスペクトルの観測から、ほとんどの銀河の波長が長い（赤い）方にずれる赤方偏移を起こしていることがわかってきていました。これは多くの銀河が徐々に遠ざかっていることを意味します。ハッブルは、次々に銀河の距離を求め、遠くの銀河ほど速いスピードで私たちから遠ざかっていることを発見しました。これは、宇宙が膨張していることを意味しています。この宇宙膨張の発見が、ビックバン宇宙論の初めての証拠になりました。

近年、そのハッブルにちなんで名付けられた、ハッブル宇宙望遠鏡や口径8m以上の大型望遠鏡によって、より遠くて若い銀河が次々に見つかっています。

▼ディープ・サーベイ

1995年、ハッブル宇宙望遠鏡が、宇宙の窓にある、おおぐま座の方向に向けられました。普通私達が星の撮影をする場合、長くても1時間程度の露出で行いますが、この時は数日に及びました。そのデータが1996年に公開され、ハッブル・ディープ・フィールド(HDF)と呼ばれています(写真下)。このように長時間露出をして、より遠くの天体を撮影することをディープ・サーベイと呼んでいます。



このHDFには、何もないと思われていた空間に、2000個以上もの銀河が写り、最も暗い銀河の明るさが28.2等にも達していました。肉眼で見ることのできる一番暗い6等星の7億5千万倍も暗い天体です。月面に置いたローソクの明かりを見るようなもので、とても暗い天体をとらえたことが想像できるでしょう。HDFの特徴は、4種類の波長で同じ領域が撮像されたことです。とても遠い銀河は、宇宙膨張によって赤方偏移を起し、本来の波長域では写らず、より赤い長い波長域で写ることになります。そして見事そのような天体が捕らえられていました。この銀河は、さらにハワイ山頂にある口径10mのケック望遠鏡で分光観測され、赤方偏移がその当時知られていた中で最も大きい、すなわち最も遠い銀河であることがわかりました。

また、HDFに写っている暗い銀河は、近くのものに比べて、小さく、不規則な形をしたものばかりだったのです。生まれた銀河がどのようにして、現在の姿に変わっていったのか今後の研究が待たれます。

さらに、最近、ハワイ大学を中心にした研究チームは、それよりもさらに遠い銀河を発見したと発表しました。今ある望遠鏡で直接このように遠方にある銀河を観測することは難しいのですが、宇宙の重力レンズ効果を利用して、不可能を可能にしました。

質量の大きな物体があると光が曲げられる性質を、重力レンズ効果と言います。この場合、約60億光年離れた銀河団の重力レンズによって、さらに遠方の銀河の姿をとらえたのです。

▼生まれたての銀河

現在、宇宙はビックバンによってはじまり、宇宙は膨張し続けていると考えられています。空間が広がる中、宇宙初期に物質(ほとんどが、水素やヘリウムといった軽い元素で、星の材料になるものです)が集まり、そこから銀河が生まれたと考えられています。生まれて間もない姿は、より遠くのものを見ることによって、はじめて知ることができます。

ディープ・サーベイによって、非常に遠くの銀河がとらえられるようになりました。HDFの最遠の銀河では、1年間に太陽10個分以上のガスが星になっていて、星生成が盛んに行われているようです。私たちの近くの銀河では、普通1年に太陽1個分以下のガスが星になっているだけなので、この銀河は生まれて間もないものだと考えられました。

ハワイ大学などによって発見された銀河は、日本がハワイに建設したすばる望遠鏡によって、赤外線での観測が行われ、1年間に太陽40個分のガスが新しい星になっていて、今知られる最も遠くて若い銀河とされています。

また、ハッブル宇宙望遠鏡やすばる望遠鏡などで観測できる波長より長い、赤外線の領域でも、宇宙赤外望遠鏡や電波望遠鏡などを使って観測が行われ、可視光では見ることのできない、ダストに覆われた若い銀河の姿もとらえられるようになってきました。そんな中には、1年間に太陽100個分のガスが星になっていると思われる天体も含まれています。

これからもいろいろな空の領域で観測が行われれば、生まれたての銀河はもっと見つかるでしょう。そして、銀河誕生の謎を解く鍵もきっとあるに違いありません。そのためには、次世代の大望遠鏡の活躍が必要です。これからも遠いかすかな産声に耳を澄ますように、大望遠鏡たちは何時間も夜空を見続けるのです。

宇宙のものさし

星までの距離は、紙の上の長さを定規で測るように簡単には測れません。天体の動きや性質を使って測ります。比較的近い星は、太陽の周りを地球が動くことによって起こる年周視差から直接距離を求めます。これは、三角測量と同じ原理です。しかし、銀河まではとても遠いため、年周視差で直接測ることができません。別のものさしが必要になります。セファイドのように、実際の明るさが分かる天体を探し、見かけの明るさとの比較から距離を求めます。この話題は、別の機会に詳しく紹介しましょう。

最近の発掘調査

カマドの脇で出土した

「神」墨書土器

(仮)府中駅南口再開発第三地区

府中市遺跡調査会

紺野英二



「神」の文字が墨書された土器

読者の皆さんは、“^{ぼくしよどき}墨書土器”という言葉聞いたことがあるでしょうか。“墨書土器”とは、土器の底部や内・外側に墨で字や記号を記した土器のことをいいます。その内容は器の用途、器の持ち主、まじないなどの記号を示している場合など、さまざまです。

今回は、「神」と墨書された土器について紹介したいと思います。この土器は、府中駅南口再開発第三地区の発掘調査現場から発見されました。当地区は、府中駅の南側の旧西友を含む一画で、南へ約150mのところには、^{ぶさし、こくちやう}武蔵国庁跡の推定地があります。

この墨書された土器は、平安時代（約1,100年位前）のもので、^{まどおろ}竪穴建物跡のカマドの脇から出土しました。カマドとは竪穴建物の中にある調理場のことです。出土した様子から、当時の使われかたを復元することは困難ですが、竪穴建物の中で使われていたものと思われます。

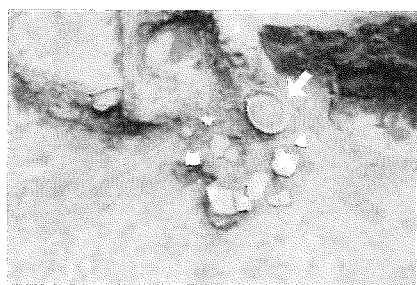
では、この「神」とは、何を指しているのでしょうか？

古代中国の文献のなかに、カマドが使われなくなると、カマドの中にいる神様が、カマドから抜けだして天に昇り、居住していた人の悪事を天にいる神様に報告してしまうという思想があります。千葉県や長野県では、カマドの中に土器が^う伏せて置かれたものが見つかっています。カマドの神様が出て行くのを防ごうとしたのでしょう。さらに、千葉県^{しやうぶく}庄作遺跡では竪穴建物跡から、まさに「^{かまどがみ}竈神」と墨書された土器も見つかっています。

日本においてこのようなカマドが使われなくなった際の^{まつ}祀りは、古墳時代（約1,600年位前）の九州地方で始まったものと考えられています。

再開発第三地区で見つかった、この「神」と墨書された土器は、出土した位置がカマドの中ではなく、伏せた状態でもない点から、カマドを使わなくなった際の祀りと結び付くとは断定できません。しかし、昔の人々が土器に墨書することで、^{ふだん}使う食器と区別したことは、カマドに神様がいるのを意識していたしるし、といえるでしょう。

今回調査している府中駅南口再開発第三地区はまだ、全体の約10%程度しか終了していません。それでも今回紹介したような興味深い資料が見つかりはじめています。ですから、ここにはまだたくさんの貴重な資料が眠っていると思います。現場の調査に携わる一員として、今後の成果が楽しみですなところでは。



墨書土器の出土した様子

中央上方がカマドの残骸。「神」の墨書土器は、カマドの向かって右脇で見つかった（矢印）。上を向いている。

平成13年度 寄贈資料一覧

	寄贈者	資料名	分類	数量
1	斎藤千恵子	張板	民俗	1点
2	林 繁	ふとん筆筒	民俗	1点
3	末永 義隆	東京オリンピック録音テープ他	民俗	5点
4	桑田 健一	防空頭巾・防毒マスク・帽子他	民俗	15点
5	矢島 中	軍人勅諭額	民俗	1点
6	須田 雄二	千社札版木	民俗	2点
7	三岡伊之助	魚籠・背負い籠	民俗	2点
8	大庭 克世	金井直編「村野四郎詩集」	図書	1点
9	関口 直甫	NASA月面図	天文	1点

平成13年度利用状況 (H13.4.1～H14.3.31)

単位：人

区分		有料		減免 (障害者等)	合計
		一般	団体		
博物館観覧者 開館日数 305日	大人	175,048	13,401	16,542	204,991
	子供	48,555	36,888	5,978	91,421
	小計	223,603	50,289	22,520	296,412
プラネタリウム 観覧者 投影日数 278日	大人	19,649	2,073	1,519	23,241
	子供	11,069	14,920	2,464	28,453
	小計	30,718	16,993	3,983	51,694
合計		254,321	67,282	26,503	348,106

平成13年度 展示解説状況 (H13.4.1～H14.3.31)

区分	定時解説	随時解説	予約解説	園内解説	合計
件数	218	124	199	103	644
大人(人)	774	569	1,026	989	3,358
子供(人)	145	323	5,668	81	6,217
計(人)	919	892	6,694	1,070	9,575

郷土の森博物館新刊紹介

◆ 府中市郷土の森博物館紀要 第15号

¥500

府中市に生息する注目すべきクモについて(V)

萱嶋 泉

武蔵国府関連遺跡出土墨書土器の基礎的検討

江口 桂

国府跡に建てられた社 ―ミヤノメ神社小考―

深澤 靖幸

隅田川から武蔵野へ

―『伊勢物語』の史的考察―

小野 一之

椀貸伝説と共有膳椀

佐藤 智敬

バックナンバーも揃っています

◆ 府中市内家分け古文書目録5 押立 町有文書目録(1)

¥400

バックナンバー

1 新宿 比留間家文書目録

2 上染屋 村野家文書目録

3 本宿 内藤治左衛門家

内藤清兵衛家文書目録

4 八幡宿 田中家文書目録

◆ 府中市郷土の森博物館 ブックレット2 古代武蔵国府

¥600

四半世紀を越える国府発掘調査の
成果を、分かりやすく、ハンディ
な1冊にまとめました。

あるむぜおは定期購読できます

「あるむぜお」は春夏秋冬の年4回発行して
います。送付ご希望の方は、4回分の送料と
して320円を添え、本館1階の受付カウ
ンターまで申し込んでください。

郷土の森博物館の本館2階、常設展示室にいつでも解説員がいるのをご存知でしょうか？

博物館がオープンして15年経った今でも「展示室がここにあるの知らなかった」と言ってみる市民が時折あるくらいですから「解説員」の存在感はあまり大きくないのかもしれませんが、しかし、学芸員とも違う大切な役割があります。

一言で言えば「展示物を説明する」のですが、それには展示物の点検（壊れたり失くなったりしていないか）、監視（危険な行動や飲食している人はいないか）、はたまた照明は点いているか、配布資料は十分あるか、といった具合に、展示室内のことに細々と目配りすることも含まれます。そして何より、いらした方の様々な要望や質問、時には苦言も、とりあえずの相談窓口となるのが私たちの仕事です。

そもそも、博物館の展示は資料（モノ）を“見て”理解できればいいのですが、見る方の知識も人さまざまですし、解説文で伝えられる情報も限られています。そこで、私たち解説員が持っている情報や話題を提供し、会話をしながら説明する中で、資料を通して府中や地域への理解を深めていただけるようにしています。そのためにも期待に背かないよう解説員同士学び合い、自己研鑽に努めています。実の所、聞いてくださる方のほうが詳しくて、こちらが教えていただくことも間々あります。でもそのことが私たちの学習の良い機会ともなり、またさらなる情報の蓄積にもなっています。理解を深めるためにもこうした相互の対話はとても有難く、有効です。

展示物を見ても何となく分かるような、分からないような……、そんな時はぜひ私たちに声をかけてみてください。どうぞお気軽に。一同、心よりお待ちしております。（Y. Y.）



展示室から

展示探検

たびっとくん&たびがらす

展示と人をつなぐ

— 私たちは解説員 —

元気!

博物館ボランティアだより ①

現在、郷土の森博物館では5グループ、計70名のボランティアさんが館を盛り上げてくれています。まずは、資料整理班の最近の活躍ぶりの紹介から。

民俗資料は、常設展示してあるほかにも膨大な数が収蔵庫に保管されています。けっして「眠らせている」わけではありませんが……「民俗資料は使ってこそ意義がある。使い方がわからなくなり使える人もいなくな

ってモノだけが残っても意味がないのではないか。」そんな思いもありました。

この班の活動のひとつは、こうした資料群を収蔵庫から引っ張り出し、展示・活用していくことです。飾る場所はたくさんあります。園内の店蔵や茅葺農家、本館のギャラリーや軒下も。しかも季節の彩が出せ



ばなおいい。というわけで、昨年度は、雛人形展・五月人形展・築着板展・神酒口展・消防道具展などを企画してきました。もちろん準備のための学習やよその博物館見学もして、解説パネルも自分たちで作ります。

もうひとつの柱は、市内の民俗資料調査です。先日、自分たちでキャッチした情報から間もなく壊される予定の鍛冶屋小屋に乗り込んできました。実測・スケッチ・撮影をして、必

要な資料を博物館にもらってきました。目下、1年後の手作り報告書刊行と展示会開催をめざして、資料整理に張り切って着手したところです。

そうしている間に、今度はお風呂屋さんが壊されるという話が舞い込んできました。今年も忙しくなりそうですね。（0.）